

講演『『ポスト韓流』の日韓文化交流』（要旨、日韓文化交流基金 NEWS48 号に掲載）

2008 年 9 月 10 日

小倉紀蔵氏（京都大学大学院准教授）

韓流とは何なのか/何だったのか

日本の歴史上、「韓国に学べ（ルックコリア）」という運動が時々起きています。最初は日本という国を作るとき、韓国や韓国系の知識人を經由して、中国の文化や制度を学びました。二回目は、江戸時代に朱子学などを取り入れたときです。三回目は、西暦 2000 年くらいから、日本の社会でかなり大々的に「韓国に学べ」という運動が起きました。日本で、「失われた 10 年」を克服しなくてはならないのに政治が停滞し、自信を失っていたそのときに、朝鮮半島では第一回の南北首脳会談が行われ、「動く朝鮮半島」対「動かない日本」という図式で多くの報道がなされました。経済や社会の分野でも、韓国の負の側面より、劇的な変化が肯定的に紹介されていました。

その延長線上に「韓流」というものが起きた、というのが私の考え方です。「韓流」というのは彗星のように現れた「ペ・ヨンジュン」や「冬のソナタ」によって、突然嵐のように吹き荒れたことは確かですが、日本人の心の中に、韓国は日本より「いい国」なんじゃないか、という漠然とした思いが形成されていたから、2003-4 年あたりの「韓流」に火がついたのではないかと思います。

もうひとつ、「時代思想の交換」というのは非常に大きい。プレモダン（前 近代）、モダン（近代）、ポストモダン（脱近代）という三つの時代思想が、今アジアの中でぐるぐる回転している。ヘーゲル的な一直線の歴史が成り立っているわけではありません。私の考えでは韓国はポストモダン社会ではありませんが、一見そう見える部分があります。日本人と韓国人は、相手の国に行ったときに自分の国と同じだ、とよく言いますが、それは周回の違いによるもので、ポストモダンやモダンのあり方が全然違っていても、一見同じように見えてしまうために、お互いに幻想を抱いたり誤解を抱いたりします。そういう時代思想のズレや誤解が、魅力の源泉になっていると思うんですね。

「冬のソナタ」の有名なせりふで、「あなたが道に迷ったら、空にポラリス（北極星）がある」というのがあります。しかしこれは儒教的な危険な考え方でもあります。『論語』で、政治をする上で一番重要なことは何か、という問いに、君子は北極星になるべきだ、北極星になれば、自分は動かなくても回りの人が自分を中心にして動くのだ、と言っています。

日本ではあまりにポストモダンが長くなって自由で無秩序になってしまったのに嫌気がさしていた。そのときにポッと現れて、とても優しく、押し付けがましくなく「僕がポラリス（不動の中心）ですよ」と言ってくれたペ・ヨンジュンにみんな吸引されたのは、ある意味で当然だと思います。そういうものの語り方で、日本において「韓流」というものが始まったわけです。

「愛」という概念も、「ポラリス」と同様に、両面性があって危険なものでもあります。

韓国の「愛＝サラン」は、身近な親兄弟から恋人、地縁、血縁関係に広げていって、最終的には地球にまで広げることができる儒教的な同心円の概念で、それこそが韓国のパワーの源泉でもあります。

「サラン」は包容的な概念でもあります。が、「ナム（＝他人）」に対する非常に強い排他性というものも同時に持っている。韓国社会には強力な排他性というものがあり、自分たちの愛の通じる領域と通じない領域をはっきり分けていますが、そこでニヒリスティックにならずに、必ず愛は通じるはずだ、と、どんどん愛の同心円を推しひろげようとするところに韓国人のダイナミズムがあるわけです。

韓流と日本の モダンへの回帰

韓流の流れと、日本の保守政権による「ポストモダンからモダンへの回帰」というのは、ある程度リンクしていた、というのが私の考え方です。「韓流」は、日本人が小泉元首相に熱狂したのとある程度一致しています。主体性を持った人間がこの日本社会にもほしい、ということです。主体性とは、近代においては理性に基づいていますが、ポストモダンの時代には、理性に対する不信感というものが渦巻いています。理性的な主体として、「ぶれない」という同じ言葉で小泉元首相とペ・ヨンジュンの両方を賞賛したとき、日本社会と日本人は、ある人物像、ある世界観を求めていたのだと思います。

日本国憲法というものは、日本国民の持つ価値の内容に対して権力はコミットしてはいけない、という考え方をしています。こういう憲法は、特に東アジアにおいては多くはありません。もし憲法改正をして、国民が持つべき価値について明記するとすると、日本は東アジアの中の一特殊ではなくて、東アジア的な一国家としてその中に埋没することになります。あとはその価値がどれだけ正しいかという、東アジアの中での価値の競争になり、中立的でメタな立場を日本は保てなくなるわけです。

東アジアには内戦が終わっていないという意味の「地雷」がまだあるんですね。中国も、朝鮮半島も「地雷」があり、それをまだ誰も踏んでいないのに、その前に歴史認識問題などで決着をつけるということはできないわけです。「地雷」があるからこそ、東アジアはまだ日本国憲法のようなものを持たず、国家が特定の価値を肯定したり否定しなくてははいけないわけです。

韓国の民主主義の「実験」と 性善説

2008年の春から夏にかけて、韓国のソウル市庁前で米国産牛肉輸入反対のろうそく集会が盛んに行われました。初期の段階では、一般の市民が休日に公園で家族の団欒・レジャーを楽しむかのように、子連れで三々五々集まり、李明博大統領にノーと言ったりした。もちろん、自分たちが選んだばかりの大統領に完全にノーだと言ったのですから、反民主主義的です。しかし、それは西洋式の民主主義に対する根本的な疑問を突きつける、東アジア的な新しい民主主義の実験だったと考えることもできるのではないかと、思っています。

す。

ろうそく集会は、一説によると女子中高生の携帯電話での呼びかけから始まったと言われています。選挙権を持たない若い人たちというのは、西洋式の民主主義では「目に見えない」人たちです。しかし、儒教的な考え方の根本には、年齢でその人の言っているものの価値を区別せず、正しいことを言った人が上に立つべきだ、というものがあります。例えば、儒教社会の「科挙」にトップで合格すると、若くして政府の重要ポストにつけるわけです。その背景には性善説があります。

日本人にとって東アジアがわからない根本は、日本人が儒教の性善説を理解できないことにあると思います。全ての人は生まれたときは100%善だという性善説の思想は、実は非常に厳しい身分上昇・下降を説明する思想です。性善説は、元来全ての人は善なのに、その道德性を発揮できない人間は社会的に転落しなくてはならないという、革命を合理化する思想です。その精神が今でも韓国では生きています。

では、日本人も韓国の「民主主義の実験」を見習うべきなのか、「ルックコリア」すべきなのか。そうではないでしょう。日本人というのはやはりアニミズムの伝統が非常に強くある。むしろその伝統から、日本型の新しい民主主義をつくるべきだと思います。

「東アジア共異体」の中心は 韓国に

反面、中国や韓国や北朝鮮の人も、おそらく日本のことはあまり理解できない。中国と韓国ももちろん違います。ということは、ヨーロッパにおけるキリスト教や西洋近代思想のような共通思想を基盤とした共同体をつくるのは、なかなか難しいのだと思います。共同体を目指しながらも、「共に異なるけれど何かのまとまりはあるのだ」という程度の「東アジア共異体」という認識の方がいいと思うんです。

その中心は、日本でも中国でもなく、韓国に置くべきだと考えています。日本が中心になるとしたら、他の国の嫌悪感が強いだろうし、中国に中心を置く場合には、中華文明圏的なヘゲモニーの強化に奉仕する共同体でしかなくなってしまう。そういう意味では、韓国が一番いいんですね。そして韓国は、新しい社会改革の実験をして、今一番動いている場所です。

その一方で、韓国は、経済の規模からも、政治社会的にも、もう十分自信を持っていいはずなのに、東アジアという大国ばかりの地域に位置しているために、自国の実力を過小評価する傾向がある。あるいは逆に高い自己評価を強調しすぎることもある。もう少し韓国の人に自信を持ってもらって、自分たちも中心的な役割を果たすべきなのだという自覚を持っていただきたい、と私は考えています。

(了)